

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月23日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520312

研究課題名（和文） 古典古代学を基盤とした「東方予型論」による包括的学問体系の構築

研究課題名（英文） Construction of the comprehensive system of erudition by “Oriental typology” on the basis of “Universal Study of Classics”

研究代表者

秋山 学（AKIYAMA MANABU）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：80231843

研究成果の概要（和文）：

旧約聖書史をギリシア・ラテン文学史の前に置くことで西洋古典文献史が、また梵語をギリシア語・ラテン語の前に置くことで西洋古典語が相対化される。このような「古典古代学」の設定に際しては、その光源として東方典礼の神学が要請されるが、仏教学を含む東方神学からの照射によって人文科学の賦活化が可能となる。こうして慈雲尊者ら本邦先覚の事績が活かされ、かつ西洋古典学はわが国の学問体系に自律的な形で位置づけられる。

研究成果の概要（英文）：

In order to give an appropriate place to the Greek and Latin culture in the system of erudition for the Japanese, I would like to propose such a field as “Universal Study of Classics” including the Old Testament theology as well as the Sanskrit language in addition to the Greek and Latin studies. We are able to treat in this field the “Siddham”, which has been handed down in the Japanese Buddhism for more than thousand years, as well as to deal with the Buddhist Ten Commandments in comparison with those of the Old Testament. On the background of this concept lies the Eastern liturgical theology, which evaluates and utilizes the tradition inherent in a culture for an effective evangelization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：古典古代学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ビザンティン典礼，人文主義，予型論，慈雲，アレクサンドリアのクレメンス，『ヨハネ福音書』，ギリシア・カトリック教会，十字架上の聖体

1. 研究開始当初の背景

本計画「古典古代学を基盤とした「東方予型論」による包括的学問体系の構築」は、平成18～20年度科研費補助金による「古典古代学を基盤とした「東方予型論」の構築と可能性をめぐる研究」（基盤研究（C））報告書

は <http://hdl.handle.net/2241/104504> を参照) を承け、新たな視座とより広範な展望のもとに企画展開されたものである。そして「包括的学問体系の構築」というテーマ設定に関して、その直接の機縁となったのは、2008年11月・中世哲学会パネルディスカッションでの「ビザンティン世界における「知」の共同体的構

造—「不断の宇宙論」としての典礼を中心に—という発表を基にした、研究代表者による「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造—写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に—」（『中世思想研究』第51号、2009年、107—119頁）であった。紀元後9/10世紀ごろのビザンティン帝国、首都コンスタンティノポリスのストゥディオス修道院では、典礼と修道制の改革とともに、小文字筆記体の発明を通じて、後世マケドニア朝ルネッサンス期に開花する人文主義を準備する機運が生まれていた。現存する古典古代の主要著作家について、その最古最良の手写本は、ほぼ10/11世紀というこの後の時期に集中的に出現するが、この修道院での典礼改革の際に目指されたのは、おそらく「神的運動としての不断の円運動」を理想とするアリストテレス的宇宙論と、復活の共同体を生きるための知恵との融合であったと思われる。

こうして、本研究企画を設立した当初は、「包括的学問体系」の規範また理想として、アリストテレス的学問体系を想定する価値観が研究代表者のうちにあった。

2. 研究の目的

研究代表者は西洋古典学専攻の出身であるが、日本における西洋古典学研究が、近代における移入以来、古代哲学・古代史学・印欧語比較言語学に分割されて進められ、狭義の「西洋古典学」が後発となった結果、それが実質的に西洋古典文学に限定される形で現在を迎えているというあり方に、大きな疑問を抱いてきた。「西洋古典学」とはHumanismusの訳語であり、元来西洋世界にあっては、哲・史・文・言語学すべてを包摂しうる人文主義そのものを意味する学問領域である。特に、わが国の大学に置かれる講座名としての「西洋古典学」という名称から想起される内容と、実質的にそこで行われている内実とが大いに乖離しているという現状は、二つの大きな問題を含んでいる。まず一つは、学徒たちを大いに欺き失望させようという教育上の責任である。もう一つは、西洋古典語教育が拓きうる多様な方面に向けての可能性を、自己限定によって乏しくし、特に神学的文献研究への可能性が摘み取られるという貧困である。

研究代表者は夙にこの問題の重大性に気づき、自らの研究領域を、神学を含めた本来の「西洋古典学」に復すべく努力してきた。具体的には、「西洋古典学」の徒を名乗るだけでは理解されない恐れがあるため、自らの研究分野を「古典古代学」と改称し、神学・比較言語学・歴史学・哲学・文学、そして近代におけるラテン語文献万般をも覆うこと

ができるよう基礎力の涵養に努めてきた。その際、印欧語比較言語学のためにサンスクリット研究が不可欠であることから、梵語文献史の重要な一過程として密教文献を位置づけ、また西洋古典文献伝承史の類比的把握のために和装古書文献を積極的に援用するという、独自の主張を展開してきた。さらにこのような理解に具体性を与えるため、キリスト教神学の前表として仏教思想を位置づける自らのスコープを「東方予型論」と名づけ、このテーマで科研費申請を継続させてきたものである。

したがって、本研究の申請の際にその目的として掲げたのは、上記1. に記した背景とも連動し、

- a. 包括的な古典学のスコープを再獲得するため、アリストテレス的学問体系を再評価し、それに基づく新たな学問体系を構築する。
- b. 9～12世紀における手写本成立の経緯を解明し、文献学を含めた普遍的方法論を提唱する。
- c. 本邦には欠如する修道的中核点を設定し、そこに根ざした真なる学問研究の遂行を目指す。

の3点であった。

3. 研究の方法

研究代表者と研究協力者は、筑波大学という同一の機関に所属するため、研究経費の一定の部分を書籍購入に充てることにより、購入した書籍を筑波大学附属中央図書館に収め、同図書館の蔵書充実のために用いた。

また、研究代表者と分担者の接点領域となる仏教学領域においては、語源学的研究を秋山が、また日本仏教資料からの伝承史的研究を吉森（秋山）が担当し、両者の密接な連携の下に正確な語誌的探究を進めた。さらに西洋古典語と仏教語等の対照研究、および語源と語義の措定については、これをつとめてデータベース化し、多方面の利用に供せられるよう配慮した結果、下記「5. 主な発表論文等」欄〔雑誌論文〕②③のような研究成果が生まれた。これらは担当する授業において随時学生・院生に配布され、後進の教育のために役立てられている。

また研究発表に際し、研究代表者はハンガリー教父学協会、国際オリゲネス学会、そしてセグド国際聖書学会といった国際的諸学会を新たな場として開拓した。従来どおり、筑波大学の学内紀要を最大限に活用したことは言うまでもない。そして3年間の期間のうち最終年度には、外国語論文の中ですでに公刊された4点をまとめて一書となし、研究課題名の基に公刊した。これは筑波大学附属図書館のシステムを通じて、すでに電子化が

行われている (<http://hdl.handle.net/2241/115391>) 研究分担者も、『国語国文』誌への論文掲載が2件を数えることになった ([雑誌論文] ⑤⑬).

4. 研究成果

3年間の研究期間を終え、改めてこの期間の研究を現在の立場から振り返ってみるならば、「包括的学問体系」の構築を目指したことにより、むしろアリストテレス的学問体系を乗り越えて、そこから漏れ落ちる宗教的学問分野の研鑽を本格的に積むことができたと言える。この際宗教的学問分野とは、一般に言う「宗教学」ではなく、むしろ仏教学を含めた「神学」とでも表現すべき学問分野のことである。言うまでもなく仏教は「神」という概念を持ち出さないが、仏教が「生死を超えた悟り」をもって救いとし、その救いを説く宗教であるとすれば、死を克服しうる存在とは洋の東西を問わず「神」に他ならず、結果的に仏教は「神学」を語る枠組みであると解して誤りがないという認識に至る。これは意図しなかった成果であり、研究代表者が専門とする教父学・聖書学の研究成果と併せ、仏教学においても本格的な実績を積むことができたことは特筆すべきである。

以下具体的に、本企画の3年間における研究成果を分類記述するならば、次の7カテゴリーに整理することができる。【下記「5. 主な発表論文等」を参照】。

I 古典学史

[雑誌論文] ④⑱

II ギリシア教父研究

[雑誌論文] ⑧⑨⑩⑪⑬⑯, [学会発表] ②④, [図書] ①

III 聖書学

[雑誌論文] ⑥, [学会発表] ①③⑤⑥⑦, [図書] ②③⑤

IV ギリシア・カトリック教会研究

[雑誌論文] ①⑫⑭⑲, [図書] ⑥⑦

V 慈雲尊者研究

[雑誌論文] ⑦⑬⑰, [図書] ④

VI 比較言語学

[雑誌論文] ②③

VII 日本文学・文献学

[雑誌論文] ⑤⑮

このうち、研究代表者が特に目覚ましい成果を挙げたのがⅢ、Ⅳ、Ⅴである。まず、Ⅲ聖書学領域にあつては、『ヨハネ福音書』第20章「復活のイエス」をめぐる、古代に遡るビザンティン典礼教会の聖書朗読暦と典礼式次第を踏まえつつ、同福音書のメッセージが「十字架の上に生きる復活のキリスト」

の共同体としての体現にあることを実証した図書③ (=学会発表③) の研究により、国際的な評価を得て、第23回セグド国際聖書学会の会友表彰を受けた。次に、

Ⅳギリシア・カトリック教会研究においては、2005年度の在外研究によりハンガリーに滞在して以来の研究成果を総括した、図書⑥の研究において、本邦では未知の「ギリシア・カトリック教会」に関して、その歴史・教会法・典礼・神学を総説し、この共同体の本質が「十字架上の聖体論」にあることを指摘しつつ、この聖体共同体からの光により文献学・古代学・教父学に向けて知見を拓き、この東方典礼共同体を基点に仏教・神道など東洋伝統思想の意義づけを試みた。この照射を通じて仏教や神道思想にまで光が及ぶという主張は、龍谷大学の久松英二氏による同書への書評 (『宗教研究』第85巻370号第3輯 166-172頁) でも高い評価を受けた。そして、

Ⅴ慈雲尊者研究にあつては、筑波大学附属中央図書館・和装古書室所蔵の『法華陀羅尼略解』が、江戸中後期の高僧・慈雲尊者飲光 (1718-1804) の直筆になるという、研究代表者の発見を特筆することができる。その公開は2010年度同図書館秋季特別展示会にて行われたが、展示図録 (図書④) はすべて研究代表者の手になるほか、これまで未知であったこの著作の発見に至る経緯に関しては、「その他」Aに挙げたように、新聞各紙によって大きく取り上げられた。

Ⅲに関しては、これまでプロテスタントの影響の大きい本邦聖書学界では受け入れられなかった研究代表者の聖書神学観が、ハンガリーの地において開花した。今後、セグド国際聖書学会を中心に一層の国際的研鑽を心がけたい。またⅣに関して研究代表者は、1962年に開催された第2ヴァチカン公会議文書のうち「東方カトリック諸教会に関する教令」をめぐる、50周年を迎えての新たな日本語解説書の執筆者として、公的に指名されることになった。そしてⅤに関しては、本研究に続き平成24年度から26年度にかけて、研究代表者による慈雲研究が科研費・挑戦的萌芽研究として採択されている。

このほかⅠに関しては、ヘロドトスからヨセフスに至る古典ギリシア歴史記述史の変遷を明確に跡づけることに成功し、Ⅱについてはアレクサンドリアのクレメンスの『プロトクレティコス』および『パイダゴゴス』の全邦訳を完成させえたことが特筆されよう。そしてⅥをめぐるのは、サンスクリット語文法を空海請来の密教経典から起こし、語根を基に解析する研究代表者独自の的方法論を確立しえたことが大きな成果であった。

以上、非常に実りの多い期間を過ごすことができ、また研究代表者にとっては、本格的

に海外の学会で研究発表を行う上でのステップを画してくれた企画となった。最後に改めて、関係各位の方々に御礼を申し上げたい。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ①秋山 学「ギリシア・カトリック教会の叙階式—三位一体のかたどり：司教・司祭・助祭—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第4号, 23-61, 2012.3.
<http://hdl.handle.net/2241/115388>
- ②秋山 学「呉音から西洋古典語へ—第2部 梵語語基表と呉音読み漢字索引—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会系(文芸・言語専攻)『文藝言語研究 文藝篇』61, 67-120, 2012.3.
- ③秋山 学「呉音から西洋古典語へ—第1部 印欧語文献としての弘法大師請来密教経典—」, 査読有, 筑波大学人文社会系(文芸・言語専攻)『文藝言語研究 言語篇』61, 1-81, 2012.3.
- ④秋山 学「フラウィウス・ヨセフスの史観～エレミヤ神学と古典史学史の止揚～」, 査読有, 筑波大学大学院国際地域研究専攻紀要『地域研究』33, 121-144, 2012.3.
- ⑤吉森(秋山)佳奈子『河海抄』の「万葉」, 査読有, 『国語国文』第81巻第1号(929号)20-36, 京都大学文学部国語学国文学研究室, 2012.1.
- ⑥秋山 学『シラ書』における「知恵」—アレクサンドリアのクレメンスとパウロの神学に照らして—, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 言語篇』60, 1-23, 2011.10.
<http://hdl.handle.net/2241/114306>
- ⑦秋山 学「慈雲尊者と戒律の系譜—筑波大学所蔵・慈雲自筆本『法華陀羅尼略解』を基に—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』60, 1-26, 2011.10.
<http://hdl.handle.net/2241/114433>
- ⑧秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』(『訓導者』)第3巻—全訳—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25-76, 2011.3.
<http://hdl.handle.net/2241/108111>
- ⑨秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』(『訓導者』)第2巻—全訳—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 言語篇』59, 1-74, 2011.3.
<http://hdl.handle.net/2241/111118>
- ⑩秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス

『パイダゴゴス』(『訓導者』)第1巻—全訳—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』59, 1-62, 2011.3.

<http://hdl.handle.net/2241/111109>

⑪秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』による理想の教育者像—ヨハネ文書からの視点を基に—」, 査読有, 筑波大学大学院国際地域研究専攻紀要『地域研究』32, 81-96, 2011.3.

<http://hdl.handle.net/2241/114095>

⑫秋山 学「ビザンティン典礼教会の聖人暦カレンダーと人名総索引—古代学の源泉としての「メノロギオン」(3)—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』58, 33-60, 2010.10. <http://hdl.handle.net/2241/106671>

⑬秋山 学「筑波大学所蔵・慈雲自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」—2010年度附属図書館特別展に際して—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』58, 1-31, 2010.10.

<http://hdl.handle.net/2241/106670>

⑭ AKIJAMA Manabu, János, „A Görög Katolikus egyházközösség Magyarországon: Öröksége és Távlatai”, 査読有, *Athanasiana* 31 (2010), pp.175-216, Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, Nyíregyháza, Hungary, 2010.7.

<http://hdl.handle.net/2241/115391>

⑮吉森(秋山)佳奈子「光源氏と内覧」, 査読有, 『国語国文』第79巻第4号(908号), 20-34, 京都大学文学部国語学国文学研究室, 2010.4.

⑯秋山 学「アレクサンドリアのクレメンス『プロトプレティコス』(『ギリシア人への勧告』)—全訳—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』57, 1-82, 2010.3.

<http://hdl.handle.net/2241/104777>

⑰秋山 学「慈雲の法統—「正法律」の位置づけをめぐる—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第2号, 79-105, 2010.3.

<http://hdl.handle.net/2241/104733>

⑱秋山 学「ヘロドトスの射程—普遍史・他者性・予型論—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』56, 1-37, 2009.10.

<http://hdl.handle.net/2241/104239>

⑲秋山 学「『東方教会法典』の神学—「十字架上の聖体」の内的構造—」, 査読有, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻『文藝言語研究 言語篇』56, 17-52, 2009.10.

<http://hdl.handle.net/2241/104232>

〔学会発表〕(計7件)

①AKIYAMA Manabu, „A Bölcsesség működése a *Sirák fiának könyvében*”, XXIII. Biblikus Konferencia („Isteni bölcsesség, emberi tapasztalat: Hokma, Szofia”, Gál Ferenc Hittudományi Főiskola, 2011. szeptember 8-10), Szeged, Hungary 2011.09.09.

②AKIYAMA Manabu, „Nagy Szent Bazil Szentírás-értelmezése a szentségek alapján”, A Magyar Patrisztikai Társaság XI. konferenciája („Szentség és Szentlélek az ókeresztény kultúrában”, 2011. június 30 – július 2), Kecskemét, Hungary 2011.07.01.

③AKIYAMA Manabu, „A „közösségért saját életet adó Jézus lelke” *János Evangéliumában*: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia tükrében”, XXII. Biblikus Konferencia („Testben élünk”, Gál Ferenc Hittudományi Főiskola, 2010. szeptember 9-11), Szeged, Hungary 2010.09.11.

④AKIYAMA Manabu, „Hallgatás és megszólalás Alexandriai Kelemennél”, A Magyar Patrisztikai Társaság X. konferenciája („A Tízparancsolattól a Szeretethimnuszig: Etikai tanítás az ókeresztény korban”, 2010. június 24-26), Kecskemét, Hungary 2010.06.26.

⑤AKIYAMA Manabu, „Szent Pál és az „egyetemes történelem” nézőpontja”, XXI. Biblikus Konferencia („Szent Pál és a pogány irodalom”, Gál Ferenc Hittudományi Főiskola, 2009. szeptember 24-26), Szeged, Hungary 2009.09.26.

⑥Manabu AKIYAMA, “La “figura” tipologica vera nelle Omelie di Origene su Ezechiele”, Colloquium Origenianum Decimum (“Origen as Writer”, University School of Philosophy and Education “Ignatianum”, Kraków, Poland, 31st August - 4th September, 2009), 2009.09.03.

⑦AKIYAMA Manabu, „Szent Pál apostol és a jánosi közösség közötti kapcsolat lehetősége”, A Magyar Patrisztikai Társaság IX. konferenciája („Pál apostol az ókori kereszténységben”, 2009. június 25-27), Kecskemét, Hungary 2009.06.26.

〔図書〕(計7件)

①秋山 学: ヨアンネス・クリュソストモス『立像をめぐる第2の講話』『追放を前にしての講話』(解説および邦訳, 小高毅編『シリーズ・世界の説教 古代教会の説教』188-224頁所収), 教文館, 2012.3.

②Manabu AKIYAMA, “La “figura” tipologica vera nelle Omelie di Origene su Ezechiele”, in: *ORIGENIANA DECIMA*, pp.539-544, *Bibliotheca Ephemeridum Theologicarum Lovanensium CCXLIV, ORIGEN AS WRITER*: Papers of the 10th International Origen Congress, University School of Philosophy and Education

“Ignatianum”, Kraków, Poland 31 August – 4 September 2009, ed. by Sylwia KACZMAREK – Henryk PIETRAS, in collaboration with Andrzej DZIADOWIEC, Uitgeverij Peeters, Leuven – Paris – Walpole Ma, 2011,10.

<http://hdl.handle.net/2241/115391>

③Manabu AKIYAMA, János, „A „közösségért saját életet adó Jézus lelke” János Evangéliumában: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia tükrében”, in: „*Testben élünk*”: XXII. Szegedi Nemzetközi Biblikus Konferencia 2010. szeptember 9-11. (szerkesztette: BENYIK György), pp.161-169, JATE Press, Szeged, Hungary, 2011,9.

<http://hdl.handle.net/2241/115391>

④秋山 学『筑波大学附属図書館特別展 慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—』(2010.10.04~10.29 筑波大学附属図書館中央図書館貴重書展示室にて開催) 図録(全;1-36頁), 2010.10.

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/jiun/zuroku.pdf>

⑤AKIYAMA Manabu, János, „Szent Pál és az „egyetemes történelem” nézőpontja”, in: *Szent Pál és a pogány irodalom*: XXI. Szegedi Nemzetközi Biblikus Konferencia 2009. szeptember 24-26. (szerkesztette: BENYIK György), pp.25-34, JATE Press, Szeged, Hungary, 2010,9. <http://hdl.handle.net/2241/115391>

⑥秋山 学『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』, 1-702, 創文社, 2010.8.

⑦秋山 学「ハンガリーのギリシア・カトリック教会—典礼を中心に—」(荻野弘之編『続・神秘の前に立つ人間—キリスト教東方の靈性を拓く II—』125-183), 新世社, 2010.3.

〔その他〕

A 短報

①秋山 学【新聞インタビュー記事】「梵語学大家, 慈雲の自筆本」, 中外日報 2010年10月21日3面.

②秋山 学【新聞インタビュー記事】「慈雲の新資料発見」, 茨城新聞 2010年10月18日朝刊18面.

③秋山 学【新聞インタビュー記事】「慈雲の新資料見つかる: 慈雲尊者の自筆本公開」, 筑波大学新聞第288号, 2010年10月4日版, 1面および5面.

④秋山 学【新聞インタビュー記事】「慈雲の直筆 筑波大に」, 朝日新聞 2010年9月28日朝刊29面(茨城版).

⑤秋山 学「慈雲さんのこと—拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』に寄せて—」, 『創文』no.534, 15-18, 2010.9. <http://hdl.handle.net/2241/113428>

B 書評

①秋山 学；SOMOS Róbert, *Logika és érvelés Órigenész műveiben*, Catena monográfiák 12, Budapest: Kairosz Kiadó, 2011, 1-248, ISBN 978-963-662-455-2, 中世哲学会学会誌『中世思想研究』LIII, 193-196, 2011.10.

②秋山 学；KENDEFFY Gábor, *Mire jó a rossz? Lactantius teológiája*, Kairosz Kiadó, 1-312, Budapest 2006, ISBN 963 662 004 0, ISSN 1587-2599 (Catena Monográfiák 9, A/5, 3500 Ft.), 中世哲学会学会誌『中世思想研究』LII, 173-177, 2010.10.

③秋山 学；TÓTH Judit, *Test és Lélek: antropológia és értelmezés Niüsszai Szent Gergely műveiben*, Kairosz Kiadó, 1-320, 2006, ISBN 963 9642 50 9, ISSN 1587-2599 (Catena Monográfiák 8, A/5, 3500 Ft.), 中世哲学会学会誌『中世思想研究』LI, 156-159, 2009.10.

C 講演

①秋山 学「慈雲尊者と戒律の系譜—筑波大学所蔵・慈雲自筆本『法華陀羅尼略解』を基に—」, 東京谷中・天王寺〔天台宗東京教区教化研修所研修会第2講座〕, 2011.05.19, 16:00-17:15.

②秋山 学「慈雲尊者と悉曇学」, 筑波大学附属図書館特別展特別講演会, 於筑波大学附属図書館集会室, 2010.10.10, 13:30-15:30
(YouTube 公開:

1<http://www.youtube.com/watch?v=YNgAPsvMrNQ> ;

2<http://www.youtube.com/watch?v=scS3IchC8PE> ;

3<http://www.youtube.com/watch?v=3gBkuMGxcXo> ;

4<http://www.youtube.com/watch?v=oq-CPS9OEFk> ;

5<http://www.youtube.com/watch?v=-H2h1H1C55s>

【以上講演会】,

1<http://www.youtube.com/watch?v=YojJgPpXU9c> ;

2<http://www.youtube.com/watch?v=tV0eMzdG6VQ>

【以上資料解説】.

③秋山 学「キリスト教の伝播とギリシア—『メノロギオン』を素材に—」(NHK 文化センター青山教室・地中海学会協力「地中海への誘い—ギリシアと地中海—珠玉の文化を旅する」第4回), 2010.06.21, 13:00-15:00.

D 受賞・表彰

①秋山 学；第23回セゲド国際聖書学会・会友表彰, 2011.09.09.

<http://www.tsukuba.ac.jp/update/awards/20110913122102.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 学 (AKIYAMA MANABU)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：80231843

(2) 研究分担者

秋山(吉森)佳奈子 (AKIYAMA(YOSHIMORI) KANAKO)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10302829